椎葉小学校
学校だより

みんなわになれ

令和３年10月29日(金)
第 １０ 号
文責　校長　鮫島　良樹

視野を広げて

子ども達とどんなふうに楽しい学習をしていくか、子ども達にどんな力を身に付けさせていくかーそれだけを考えて日々邁進していた教諭時代。一生懸命走ってきましたが、今思えば狭い視野で走る競走馬のようでした。

教頭、校長いわゆる管理職になると、「学校経営」や「人材育成」をしていかなければならないので、教諭時代の意識やものの見方・考え方では到底務まりません。的確な思考や判断をするためには、視野（空間［学級＜学校＜地域＜日本国家＜地球規模］や時空［過去・現在・未来］）も広げていく必要があります。教諭時代は「学校とは何ぞや？」「学校の存在意義とは？」等、難しいことを考えたことはなかったのですが、管理職になると、こういう答えが価値観によって多様に存在するような、本質を迫られるような問題に日々向き合わなければなりません。現場（学校）を導くために、方針を打ち出さなければなりませんから。（「かくあるべし思考」には、あまり捕らわれたくないのですが…）

管理職として今一番強く認識していることは、「学校は独り相撲をしてはならない。地域あっての学校であり、地域と共に未来に向かって歩んでいきたい。」です。

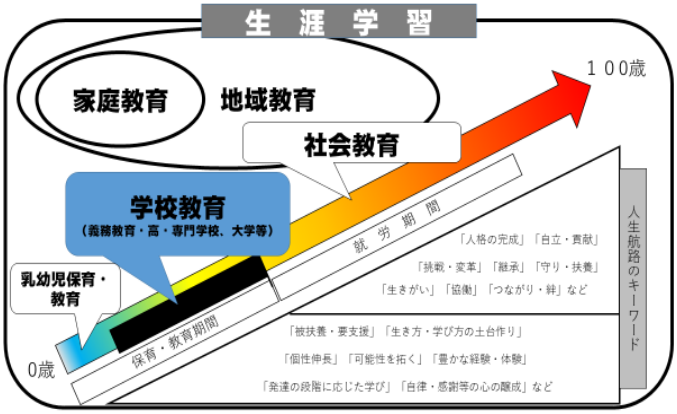
【稲の刈り方のレクチャーを受ける低学年児童】

学校の立ち位置

「学校は独り相撲をしてはならない」について少し考えてみたいと思います。

前述したように、教諭時代の私は目の前の子ども、学級のことで頭がいっぱいで、学校の立ち位置などを考えたことはありませんでした。学校第一主義と言いますか、自分（学校）の都合・思いを中心に据えた思考に終始しており、うまくいかない時は（口には出さないものの）、保護者や制度など、自分以外のせいにすることが多かったように思います。そこでは、「子どもの教育に関することは、自分（学校）がプロなのだから、全て網羅できる、何でも請け負うべきである。」という使命感や責任感がありました。「プロ＝万能」という思い込みが強く今思うと、思い上がりで無責任だったなあと感じます。

さて、下の図をご覧ください。私達が携わる学校教育は、生涯学習の体系で見ると「保育・教育期間」の一部となります。



この一連の流れの中で、（我々は万能なんだ、我々だけでやるんだ）という教育を行ったとしたら、人生の土台を築く大切な時期にある子ども達に、狭く偏った世界しか提供できないということになるのではないでしょうか。

いや、そもそもそんな教育はもはや不可能と言えます。

価値観や社会の多様化に伴い、公教育の使命からか、あらゆるものを取り入れてきた学校教育。対象となる子どもや家庭はもちろん、教える内容、教え方まで大きく様変わりしました。それなのに、前述のような相も変わらぬ意識で教育を行おうとしていたら、社会に対応できる訳がありません。事実、学校は万能どころか、飽和状態、崩壊寸前に陥っているところすら出てきているのが現状です。

「教員は聖職」そう、子ども達を教え導く教員は慈愛奉仕の精神に満ちた善人であるべきですから、「子ども達のため」を錦の御旗に、よかれよかれと肥大化して、首が回らなくなってしまったのです。（教員志願者低下の要因の一つにも）

教育は学校に丸投げではなく…

「子どもの教育は学校に任せました。」「言うこと聞かなかったら、カンクローを一発かませてください。」ー学校を丸ごと信頼しての御発言、有り難いと同時に懐かしいです。しかし、学校に子どもの教育を一任する時代は終わりました。古き良き時代の伝統が息づく椎葉村とはいえ、5年後、10年後も今までのとおりになるかどうかは分かりません。

管理職として「信頼される学校づくり」を目指していることは断言いたします。しかし、そこには「何でもかんでも学校に任せてください。」のニュアンスはなく、むしろ「子どもの教育に対し、パートナーとして共に力を合わせていきましょう」という思いを込めています。教育は、学習、生活、健康…と幅広いです。そんな中で、子ども達の安心安全を保障しつつ、統率しやすくするために校則・ルールがあります。それが、ゆがんだり行き過ぎて偏屈になったりすることはあるでしょう。「ブラック校則」などとはやし立てるのではなく、ともに考えていきましょう。SNSで同意を求めるのではなく、「異議あり！」と直接声に出しましょう。「子どものための教育」を共通のゴールにしているならば、共に力を合わせていきたいと強く願います。

【除草していただき、すっきりした校舎北側】

学校運営協議会（コミュニティ・スクール）

実は、これまで述べてきたことを背景に、国が推進しようとしている事業が「学校運営協議会」です。これまでの「学校支援地域本部事業」との違いは、学校と地域の関係が貸し借りからパートナーに変わるということです。「学校のために頑張らんといかんやろ。」という思いが保護者や地域からひしひしと伝わってまいります。ありがとうございます。椎葉小は国が進める事業の素地は既に万全と言えます。

子ども達をどんな人間に育てていくか、そのために地域ぐるみで取り組めることは何か、パートナーとして協働していくことになります。教育（人材づくり）は、地域創生の柱です。子ども達は宝物であり、未来は子ども達のものです。

御礼

椎葉幸司さん（小崎）が給食センターに９０kgのお米を寄贈してくださいました。
子ども達も職員もおいしくいただきました。ありがとうございました。